View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

日本福祉大学子ども発達学論集　第 3 号　2011 年 1 月

実践報告

小学校教員養成課程〈性と健康〉教育の実践における学生の〈性教育〉に対する意識の変化に関する考察

木　全　和　巳
日本福祉大学　社会福祉学部
村　瀬　桃　子
山形県立米沢女子短期大学
大　塚　あつ子
愛知“人間と性”教育研究協議会
新　崎　道　子
愛知“人間と性”教育研究協議会

Consideration about the Change of the Consciousness for the Sexual Education of the Student on "Health of Human Sexuality" Educational Practice at the Primary School Teacher Training Course

Kazumi KIMATA
Faculty of Social Welfare, Nihon Fukushi University
Toko MURASE
Yamagata Prefectural Yonezawa Women's Junior College
Astuko OTSUKA
The Aichi Council for Education and Study on Human Sexuality
Michiko SHINZAKI
The Aichi Council for Education and Study on Human Sexuality

キーワード：〈性と健康〉教育　小学校教員養成，学生の意識の変化，授業評価

第1章　問題意識，目的，方法

1．問題意識

2007年度から愛知淑徳大学において小学校教員の養成が始まった．小学校の教員にも性と生の健康に関する授業や生活指導という実践ができる力を身につけさせたいという松田秀子先生からの依頼を積極的に受けとめ，大学2年生を対象として「性と健康」という半期の講義を行うことにした．講義のテーマは，「こころとからだの主人公になりゆく子どもたちと豊かなセクシュアリティを育み合うための性と生の確かな教育実践をつくる」である．2010年度で，3回目の講義となる．小学校教員養成課程におけるこうした講義科目の配置は，わが国においては初めてのことであり，15回の講義内容と方法については，4人の担当者で何度も議論を重ねた．

価値がある実践研究であると思い，2008年度には，「小学校教員養成課程における〈性の健康〉教育のとりくみ」というタイトルで報告した[1]．この実践報告では，「できるだけ一方的に語る講義は少なくして，学生たちに小学生になってもらいながら参加する模擬授業を多く取り入れた．また，スクールカウンセラーをはじめ，特別支援学校のもと教員などの多様なゲストを迎えて，講義でつないでいく方法をとった．最後には，学生自身に，指導案を書いてもらい模擬授業実践を行った」[2] 実践の報告とその都度の学生の感想と最後のレポートを素材として，小学校教員養成過程における〈性と健康〉教育の意義について，詳細に記した．

初年度の成果としては，「『調べ学習等で読んだ本では，もっと調べてみたいというものに出会うことができました．自分の性，相手の性を大切にしていくことは子どもたちに学んでもらいたいことだと思います．私自身もこれから自分を大切にしていきたいと思うことができました』，『半期この授業を受けて，本当に多くのことを学びました．私の大嫌いだった性教育も受け入れることができるようになりました』．という学生の感想にみられるように，全体として，好評であり，気づきや学びが深まった内容であったと考えている」[3]．また，「私たち自身も，学生の反応や毎回学生に書いてもらう感想文から，模擬授業や講義の内容の更なる改善につながる気づきが得られた」[4] と，総括した．

課題としては，「事前，事後の学生の『性と健康』に関する意識の変化を量的にも質的にも評価できるような仕組みを設定しておかなかったために，この講義の相対的で客観的な評価が確実に得られなかったことである．2年目は，1年目のふりかえりを活かしつつ，更なる内容の発展と評価の方法の確立に向けて，実践を積み重ねていきたい」[5] と，記している．

シラバスにも書いたように，子どもたちの性と生の実態からしても，私たちのこのような大学における授業実践の意義は大きいことは確信しているが，将来教師になりゆく若者たちにとっての意義については，実証的に明らかにしてこなかったように思われる．

教員養成系大学である宮城教育大学では，「人間と性」という講義が行われている（数見隆生編著，2010）[6] が，あくまでも学生当事者向けの性教育であり，実際に小学生に教えるための講義ではない．同様な取り組みは，一橋大学，津田塾大学などにおいても行われている．日本福祉大学社会福祉学部においても「こころとからだ」などの講義名で開講されている．

また，近年，大学においてもFDの強調がなされ，授業評価についても，各大学では，さまざまな取り組みが行われている．性教育に関しては，事前事後の変化や講義のプロセスにおける変化について，ていねいに分析を試みた報告は若干見つけることができた[7]．

中央大学の横湯園子による高校生のピアカウンセラー養成の取り組みは，統計的にも評価尺度はしっかりしており，今後の私たちの研究においても，参考になる方法である[8]．

この論文のような小学校教員養成において性教育ができる教師を目的とする講義における分析は，先行研究として見つけることはできなかった．この意味では，本論文の書かれる意義はあると考える．

2．目的

2年目は，1年目のふりかえりを活かして，第2章に書いてあるように15回の講義内容と方法の組み替えを行った．同時に，課題に記したように「事前，事後の学生の『性と健康』に関する意識の変化を量的にも質的にも評価できるような仕組みを設定」した．

本論文は，この「事前，事後の学生の『性と健康』に関する意識の変化」を報告して，〈性と健康〉教育における私たちの実践の評価についての考察を深めていくことを目的としている．

3．方法

⑴　対象：2009 年度，愛知淑徳大学文学部教育学科 2 年生　男性 8 名　女性 20 名　計 28 名．

⑵　期間：後期水曜 1 限，〈性と健康〉教育の 15 回の講義を通して

⑶　意識の変化の評価の方法：事前と事後に「初回アンケート」，「最終回アンケート」を実施した．この事前事後のアンケートの比較を分析の中心とする．また，毎回の講義後に A5 一枚の感想文を記入してもらった．学生一人ひとりの表をつくり，15 回分すべてをエクセルに記入して，感想の深まりを追えるようにした．また，学生への最終レポートの記述も参考にした．

⑷　論文の記述の方法：第 2 章において，15 回の講義の概要を記した．第 3 章では，①はじめに事前事後のアンケートの分析を行った．②次に，アンケートと感想から，学生たちを「授業者の意図や思いを比較的つかんでいる学生」，「模擬授業を積極的に受けとめている学生」，「全体的に肯定的に受けとめている学生」，「恥ずかしさが抜けない学生」などに分類して，それぞれの特徴を 15 回の感想から抜き出してまとめ，考察をした．また，③これまでの人生の経験から〈性と健康〉教育について受けとめにくかった学生については，個別に取り上げて考察を加えた．最後に，第 4 章考察として，今後の課題についてまとめた．

⑸　このような方法をとることで，「事前，事後の学生の『性と健康』に関する意識の変化」について知ることができ，〈性と健康〉教育における私たちの授業実践の評価が得られるであろう．

なお講義参加学生には，研究目的でのアンケートの記載依頼と感想文の内容を使用することを予め口頭で話をして，了解を得ている．

第 2 章　2009 年度の「性の健康」教育の講義の概要

2009 年度の「性の健康」教育の講義の概要を以下に示す．

第一回	ガイダンス	＜目標＞ ・講義の全体の目標と流れについて把握することができる． ・基本的な用語「性の健康」「性の権利」「セックス」「ジェンダー」「セクシュアリティ」について理解することができる． ＜講義の流れ＞ ・絵本を読む． ・テーマとその解説，基本的用語の説明．
第二回	女の子・男の子のからだ（低学年①）	＜目標＞ ・外性器について，名前・つくり・はたらき・成り立ちを理解することができる． ・プライベートゾーンを理解し，自分のからだや性器を自分のものとして大切にしていく気持ちを養う． ＜授業の流れ＞ ・からだの名前あてゲームをしながら，からだにはいろいろな名前があることを確認する． ・外性器は男女によって違うことを確認する． ・プライベートゾーンを知る． ・からだは性器もふくめ一人ひとりみんな違うことを知る．
第三回	うまれるよ（低学年②）	＜目標＞ ・男の人（父親）の精子と女の人（母親）の卵子が一緒になり，自分の命が生まれることを知る． ・自分が母親のお腹の中で，どのように育ち，どのように生まれてきたかを学習することにより，いのちを大切にしようとする気持ちを持つことができる． ＜授業の流れ＞ ・紙芝居「わたしのたんじょう」を見ながら，生まれる前の様子を知る． ・子宮の中の様子を知る． ・生まれるときの様子を知る．
第四回	おとなになりゆくこころとからだ（中学年①） 二時間完了　本時2／2	＜目標＞ ・誕生⇒育ち⇒成人⇒死というヒトの一生を概観し，小学校中学年時は思春期前期であることを知り，二次性徴について大まかな知識を持つ． ・自分や他者を関わり合いの中で客観的に見つめなおす力を育て，自分らしさ・その人らしさを認め合う大切さがわかる． ＜授業の流れ＞ ・「かまきりのこまりごと」を知る． ・かまきりらしさを気にしていることに気付く． ・グループで，「かまきりのこまりごと」の相談にのる． ・ロールプレーをしながら，励ましや自信につながる「言葉かけ」を考える． ・自分らしさ・その人らしさ＝まるごとのこころとからだは，それだけで価値あることを確認する．

第五回	学校における性の健康教育の歴史と問題点	＜目標＞ ・過去の性教育をふりかえり，検討することでこれからの性の健康教育はどうあるべきか，それぞれが考えることができるようにする． ＜講義の流れ＞ ・教育政策として学校での性教育はいつから行われていたか． ・戦前の性教育とは？ ・戦後の性教育の出発点は？ ・HIV/AIDS の問題と性教育
第六回	大切なわたしのからだと気持ち（中学年②）	＜目標＞ ・相手の気持ちを考えないタッチや暴力は許されない行為であることをしっかり認識し，他者を傷つけない安心で安全なふれあいの大切さがわかる． ・プライベートゾーンの自己管理力をつけ，イヤなタッチには「イヤ！やめて！」とはっきり言えるようになる． ・被害を受けたり，受けた人を見たりしたら，身近な信頼できる大人に話すことができる． ＜授業の流れ＞ ・提示されたパネルの場面を見て，どんなタッチで，されている人の気持ちはどうなのか考える． ・「暴力」について学ぶ． ・「わたしのからだはわたしのもの」という意味を考える． ・イヤなタッチやふれあいの想定場面を考え，グループで役割を決め演じる．
第七回	いのちのつながり（高学年①）二時間完了　本時2／2	＜目標＞ ・「人の一生」の中で，今の自分の位置について知り，こころとからだが大人に向かって大きく変わっていく時期であることを知る． ・二次性徴について，科学的な知識を持つことができるとともに，大人になりゆくからだを肯定的にとらえることができる． ・自分のいのちは多くの命が紡がれてきた結果であることを知ることにより，いのちの不思議さ，面白さ，奥深さを感じ取り，いのちを大切にしようとする気持ちを持つことができる． ・いのちのはじまりについて，性のしくみや意味を科学的に理解することによりいのちの尊さに気付かせる． ＜授業の流れ＞ ・「人生テープ」で今の自分の位置を確認する． ・「わたし」につながるいのちのバトンタッチについて考える． ・自分もいのちをつなげる立場になることもあることに気付く． ・私たちは，命をどのようにつなげてきたかを知る． ・ヒトの受精のしくみ ・いのちのバトンタッチが行われる時期について考える．
第八回	現代社会と子どもたち	＜目標＞ ・若者たちを取り巻く性の状況と性情報の実態を知る． ・エイズを含む性感染症について学び，性行為における感染の可能性を考える． ・関わりについて考え，自分と相手を大切にする気持ちを養う． ＜講義の流れ＞ ・若者を取り巻く性の状況と性情報の実態を知る． ・エイズを含む性感染症について学び，性行為における感染の可能性を考える． ・ワーク「水の交換」で，感染の広がりを感じる． ・ワーク「愛の12段階」で，関わりについて考える．
第九回	〈しょうがい〉のある子どもと「性の教育」	＜目標＞ ・障害種や障害の軽重に関わらず性的存在であることがわかる． ・『問題行動』は発達要求であることがわかる． ・人間関係を構築するには，トレーニングがいることがわかる． ・自己肯定感を育むことの重要性がわかる． ＜講義の流れ＞ ・思春期を見通した性の関わりとは？ ・指導内容 ・どんな授業なのか？ ・模擬授業「わくわくからだ探検」
第十回	人を好きになるってどんなこと？（高学年②）	＜目標＞ ・「あの子が好き！気になる！」という恋愛感情に気付いたり向き合ったりする中で，相手を大切にしながら自分の考えや気持ちを伝える態度や方法を身につける． ・「あの子が好き！気になる！」という恋愛感情は，性別にとらわれずに起きることを理解し，多様な性や性のあり方に気付く． ＜授業の流れ＞ ・『赤い実はじけた』の読み聞かせを通して，「あの子が好き・気になる」という恋愛感情の芽生えに目を向ける． ・「“あなたのことが大好きです”と告白されたが，その人のことを嫌いではないけど好きとはいえない気がする．どうしたらいいだろう．」という相談内容をもとに，相談した人にどう返答したらいいかグループで話し合う． ・グループ発表 ・相手に届くように「断る＝自分の気持ちを伝える」大切さに気づき，断り方のロールプレイをする．
第十一回	いろいろな家族・いろいろな生き方（高学年③）二時間完了　本時2／2	＜目標＞ ・自分の性やジェンダー意識，外見や職業から性別を決めつけていないか？等を点検し，自分の中の性やジェンダーに関する偏見・差別に気付く． ・家族やその一員である自分を，一歩外から見つめなおし，さまざまな構成の家族がいてそ

		れぞれの生き方・暮らし方をしていることを知る． ・親しい関係の家族間でも，気持ちや考えは言葉にして相手に届くように伝える大切さがわかる．
		＜授業の流れ＞ ・いろいろな家族の「絵」を見て，どんな構成の家族か考える． ・想定家族とストーリーをもとに，小 6 の子どもが主人公の寸劇を作る． ・各グループの作った「家族」の寸劇の発表
第十二回	学校教育における性教育の位置づけと体系	＜目標＞ ・子どもの成長・発達にあった性の健康教育について ・私たちの考える「性の健康」教育を探る． ・子どもたちの現状に合った教材を選べる眼を養う．
		＜講義の流れ＞ ・学習指導要領について ・学習指導要領の中に見る，「性の健康」教育に関する内容，「村瀬試案」について ・グループごとに自分たちで考える「性の健康」教育の試案を作る．
第十三回	授業案の作成・発表	＜学生が作成した指導案の主題名・対象学年＞ ①「赤ちゃん誕生」2 年生 ②「いのちのつながり」3 年生 ③「おとなへのはじまりの一歩」4 年生 ④「恋愛（好きという気持ち）」5 年生 ⑤「実は危険？！携帯電話・インターネット」6 年生
第十四回・十五回	授業案を模擬実践する	＜模擬実践主題名と目標＞ ①「恋愛（好きという気持ち）」 ・人を好きになるという気持ちは恥じることではなく素晴らしいことなので，その気持ちを大切にするという考えを持つことができる． ・「好き」という言葉には 2 通りの意味“Like”と“Love”があることに気付くことができる． ②「おとなへのはじまりの一歩」 3 時間完了　本時 2/3 ・自分のからだの変化を生命の連続性から考え，意欲的に学習する． ・月経や射精はいのちのもとを生み出す大切な仕組みであることを知る． ・月経や射精の学習を通して，男女が思いやりの心を持って接することができるようにする．

第 3 章　学生の意識の変化

1．アンケート調査から

学生の性教育に対する意識の変化を追うために，講義の初回と最終回にアンケートに答えてもらった．アンケート内容と回答数は，以下の表のとおりである．

初回…26 名			最終回…27 名
1．あなたが受けてきた性教育について教えてください．			
①　小学校ではしっかり性教育を受けてきましたか．			
	はい	5	
	いいえ	20	
	無回答	1	
②　小学何年生で性教育を受けましたか．			
	1 年生	0	
	2 年生	0	
	3 年生	1	
	4 年生	4	
＊複数回答あり	5 年生*	15	
	6 年生*	10	
	受けていない	1	
③　小学校で受けた性教育は，役に立っていると思いますか．			
	思う	10	
	思わない	16	
④　小学校で受けた性教育を，受けて良かったと思いますか．			
	思う	14	
	思わない	12	
⑤　性教育を受けた時の気持ちはどうでしたか．			
	はずかしかった*	12	
＊複数回答あり	いやだった*	2	
	大事だと思った*	8	
	その他**	6	
その他**…特に何も思わなかった，何とも思わなかった，覚えていない，意味がわからなかった，あまり何も思わない，知ってた			
2．性教育の必要性について教えてください．			2．
①　今の小学生に性教育は必要だと思いますか．			
	思う	26	⇒　27
	思わない	0	⇒　0
3．あなたの性教育に対する意欲について教えてください．			3．
①　あなたは教師になったら，性教育をやりたいと思いますか．			
	積極的にやりたい	0	⇒　9
	やってみたい	22	⇒　17
	それほどでもない	4	⇒　1
	やりたくない	0	⇒　0
②　あなたが教師になったら，性教育をやる自信がありますか．			
	ある	1	⇒　6
	ない	7	⇒　5
	わからない	18	⇒　16

③　あなたの性知識はどれぐらいのレベルだと思いますか．			
	高い	1	⇒　0
	普通	19	⇒　19
	低い	6	⇒　8

まず，初回のみの設問（1．あなたが受けてきた性教育について教えてください）の回答傾向を見ると，性教育を受けた学年は5〜6年生が多かった．しかし，小学校でしっかり性教育を受けてきたという意識は薄い．また，小学校で性教育を受けて良かったと回答する者が過半数を超える（26名中14名）一方で，役に立っていると思う者は少ない（26名中10名）．性教育を受けた時の気持ちについては，はずかしいという回答が最も多い(26名中12名）が，一方で大事だと思う者も次いで多い（26名中8人）．

次に，初回と最終回での意識の変化について見ていきたい．まず，性教育に対する意欲について，①の設問では，初回は「積極的にやりたい」と回答した者は0名であったが，最終回では9名に増えた．「それほどでもない」は4名から1名に減っている．②の設問では，「ある」と回答した者も1名から6名に増えている．

③の設問では，「高い」が1名から0に減っており，「低い」と答えたものも6名から8名に増えている．これは，「性の健康」に関する学習を通して，いかに知識が曖昧であったかを認識した結果であると思われる（詳しくは⑵参照）．

なお，初回も最終回も回答した全員が，今の小学生に性教育は必要だと思っている．

ところで，愛知淑徳大学「性の健康」教育を受講した教員養成課程の28名には，毎回授業後に感想を書いてもらっていた．その感想を読んでみると，多くの学生が模擬授業に対して肯定的に受けとめていた．そこで，2．では，授業の感想文を概観したい．その上で，特に「授業者の意図や思いを比較的つかんでいる学生」，および「模擬授業を積極的に受けとめている学生」を中心に省察したい．また，多くの学生は肯定的に受けとめていたが，授業への批判等も少数だが存在した．具体的には，他の模擬授業と比べ批判が目立った性被害の授業である．また，ある学生は家族に関する授業で否定的な反応を示した．そこで3．では，今後の「性の健康」教育の講義への課題を探るために，性被害の授業，および自身の家族観を揺さぶられた学生についても，授業後の感想文から分析したい．

2．授業後の感想文からみる学生の意識

⑴　模擬授業に対する学生の受けとめ方

「性の健康」教育に対して多くの学生が肯定的な受けとめ方をしていたが，講義が開始した頃ははずかしい思いをしていたようである．いくつか取りあげてみると，「はじめは聞いてて恥ずかしい気持ちとかあったけど，今は頑張って性教育をしていかなきゃいけないという使命感が出てきています」(最終回，B)，というように．また，ゆっくりと少しずつ変容していく学生もいた．例えば，講義も後半になった第9回の時点で「性ははずかしいものじゃないのに，未だに授業を受けていてはずかしいな…と思ってしまう」学生も，最終回の感想では「性教育について恥ずかしいイメージだったけど，授業を受けてイメージが変わりました」(C）と述べている．また他の学生は「私は小・中・高とずっと性（保健）については避けてきた」(第1回)，「私はすごく性について学ぶことに抵抗を持っています」(第4回)，「性器の部分について言葉に出したりすることは，すごい恥ずかしいと思っていた」(第9回）と，感想を書いていたが，最終回には「すごい自分は最初の時と比べて変わった!! 最初はすごい恥ずかしさを感じていたけれど，今はあまり恥ずかしいものとかんじなくなった」(D）と述べている．当初は恥ずかしい気持ちがありつつも，多くが克服していったようである．

また，前年度と同様，自身の性知識のなさに気づく学生も複数いた．ある学生は，模擬授業の初回の感想に「自分が教えるには勉強不足なのをひしひしと感じ」(第2回）ている．また他のある学生は「無意識のうちに射精が行われる（夢精）と聞いていて，私は高校まで夢精を知りませんでした．知った理由も友達から教えてもらいました．なので，ずっと謎でした．だから，今日みたいにちゃんとした指導があることの大切さを感じました」(第7回，E）というように述べている．

このように，全体的には模擬授業に対して満足感が高い学生が大半であったといえよう．

次に，模擬授業を肯定的に受けとめている学生の中でも，授業者の意図や思いを比較的よくつかんでいると思われる学生，また模擬授業に対して期待をし，積極的に受けとめている学生の感想を省察し，さらに今後の授業

に役立てたい．

⑵　授業者の意図や思いを比較的つかんでいる学生

授業者は，一人ひとりの子どもをしっかりと見つめ，あなたは大切な人なのだという思いで授業を行っている．このような思いをしっかり受けとめている学生も散見できた．

例えば，「みんなちがってみんな○（マル）というメッセージが強く感じられた」(第5回，F)，「先生方は，『皆一人ひとりそれぞれ違うから安心して』と毎回言っているなと感じた」(第7回，G）等の感想から，比較的授業者の意図をくみ取っていると思われる．性器について，なぜ教えなければならないかについても「医者に，自分の性器をきちんと説明できるようになることや名前を知ることが男女平等の性意識の確立につながる」(第2回，H）というような受けとめ方をした学生もいた．

また，「先生が授業のはじめに『聞いているのがつらくなったら教室を出てもいいよ.』と一言添えたのがはっとさせられました」(第6回，F）というような「気づき」もあった．

なお，比較的授業者の意図をくみ取っていると思われる学生も，最初のうちは「性教育の壁が見えた．名前を言うところから難しい」(第2回）と感じ，「初めて知ったこともあった」(第3回，F）と述べている．また「自分が知らなかった性器の名称などもあって」(第2回)，「初めて知ることが多く驚いた」(第3回)，「恥ずかしいものという考えがあった．自分自身の知識のなさにも気付かされた」(最終回，G）と，自身の性知識の少なさや羞恥心を自覚している学生もいる．他の学生は「子どもとどう性の問題で向き合えばいいのか不安があります．自分自身の性についての価値観や判断力を養うためにも，性に関してどのような考え方があるのかや，問題があるのかを学んでいきたい」(第1回，H）と不安を隠さないが，講義2回目で「自分の中の性に対する考え方が改まった」(第2回，H）と感想を記している．

ところで，意図を比較的理解している学生でも，「今日の劇は，どこまでやればよいのか少しわからない所があった」(第11回，G）と率直に模擬授業への疑問を述べている感想もある．また，「児童に授業することで，どんな影響を与えるか考えると難しい」(最終回，F）と考える学生もいた．

⑶　模擬授業を積極的に受けとめている学生

なお，模擬授業に対して，毎回新しい発見があるためか，「今日の模擬授業はすごくうまかった」(第2回)，「今日の授業はすごくためになることばかり」(第3回，I)，「毎週この授業を楽しみにしています!!」(第10回，E)，「毎回思うのですが，この授業はいつも楽しくておもしろい」(第5回，J)，「一週間の授業の中で一番楽しみな授業でした」(最終回，K）等の感想もみられた．

また，「もっと知りたいと思ったことがたくさんあった．赤ちゃんのことを知りたいと思ったのは初めてだった」(第3回，K）というように授業で初めて興味をもつ学生もいた．最終回の感想では，「受ける前と後では，性への意識が180°変わった」(最終回，E)，「自分自身性について知識はあると思っていたのですが，この授業を受けて全く知識が足りないということと，これから先もっと知識を学んでいかなければならない」(最終回，J)，「自分の性に関する見方がとても大きく変わりました」(最終回，K）というような感想であった．

しかし，手放しで我々の講義を称賛しているわけではもちろんない．例えば，「かまきりのこまりごと」の模擬授業では，「悪い所を逆に良い所にもっていくという方法はいい方法なのだろうかとも思いました．自分は悪い所はもうみとめて，それでも大丈夫だよ的な意見を言われた方がうれしい」(第5回，I）と意見も述べている．

3．レポート提出を断念した！……その意識を追って

模擬授業「いろいろな家族・いろいろな生き方」で悲痛な感想を書いていたAさんは，私たちが期待していたレポートの提出を，残念ながら断念していた．なぜ？単位取得にも響く大切なレポートを作成，提出することができなかったのだろう．少しでもその理由を考えてみることが，講義を担当した者の責務だと思っている．そのために，毎回の講義内容とAさんの感想を照らし合わせながら，Aさんの戸惑いや疑念，意識のゆれを追ってみることにする．その作業の中から，特に模擬授業の内容設定や手法，教材の適切性などの問題も明らかになってくると思われる．

初回アンケートの「①小学校ではしっかり性教育を受けてきましたか」に，『いいえ』と答え，「②小学校何年生で性教育を受けましたか」で，『4年生』と答えている．第①講義のガイダンスのAさんの感想は，『絵本が衝撃

的だった．高校生向きかなって思ったけど，小学1〜2年生でも読んだというお話を聞いてすごいなと思った．／水曜1限は眠いけど，がんばってくるようにしよう．知らないことがいっぱいあると思うから，いっぱい学んで役立てていきたい.』と期待と意欲を膨らませている．

第②講義は，低学年模擬授業「女の子・男の子のからだ」であった．Aさんの感想：『“はずかしい”という気持ちが強くてなかなか口にできないと思った．でも，自分の中でマイナスなイメージを持ってしまうと，教える子どもたちにもマイナスに伝わってしまうからちゃんと勉強して正しい伝え方を学んで自信を持って授業できるようになりたい.』ここではずかしい気持ちが強いといっているのは，外性器の名称，特に女の子の外性器の名称についてである．男の子の通称「おちんちん」に対して女の子の外性器には対等な通称名がないことを知って，学生たちはとても驚いていた．Aさんもその一人である．

第③講義の低学年模擬授業「うまれるよ」と，第④講義「学校における性の健康教育の歴史と問題点」は，続けて欠席している．(欠席理由は分からないが，初回感想で，朝起きるのが辛いらしいことがうかがえるので，ひょっとしたらそのあたりの理由かもしれない.）この序盤における2講義の欠席が，Aさんにとって，グループ作りや知識の積み重ねに微妙な支障をきたしたことが，後から振り返ってうかがえる．15回を通して欠席者が少なく，回を追うごとに座席など自然に固定化したグループになってきていたし，『性教育の歴史と問題点』を学び探る機会は，多分この講義しかないだろうと思われるからである．

第⑤講義は中学年模擬授業「子どもから少しずつ大人へ近づく〜丸ごとのからだとこころ＝自分らしさ〜」で，この報告を書いている新崎が担当した．2時間完了の内容で，1/2の「中学年って？　からだもこころも変わり始める時期」の部分は，模擬授業ではなく20分間で説明する形をとった．この1/2は，初めて学ぶ『二次性徴』の仕組みや働きで，中学年の子ども達にとっては，新用語の多さや当事者性を持ってイメージをすることができにくい内容である．実際2008年度の講義では，この部分を模擬授業として行ったのであるが，学生達からも『ここは中学年で理解するのは無理なのではないか？』という感想が多く出てきた．授業者として，『二次性徴』は繰り返し毎年取り扱うことが大切だと考え，今年度は中学年では『説明』にとどめ，高学年で模擬授業として行うように見直したのである．

実際の模擬授業（本時2/2）の内容は，「丸ごとのからだとこころ＝自分らしさはみんな○！」であった．主題を「育てよう　自分らしさ・その人らしさ」とし，自作教材「かまきりのこまりごと」を用いて実施した．この授業を受けたAさんの感想：『“ナルシスト”というと自意識過剰みたいなイメージでマイナスに思っていた．自分が大好きというのは，とっても大切なんだよという授業を聞いて「自分がすき」というのをあまりいい意味でみていなかったなあとはずかしく思った．かまきりりゅうじくんの時にはそんなことも授業に入れたい．“ナルシスト”でいいじゃんって.』と，模擬授業を大学2年の今現在の自分の心で受けとめたことが伝わってくる感想である．

第⑥講義中学年模擬授業「大切なわたしのからだと気持〜イヤなタッチ⇔安心なふれあい〜」について．昨年度は「性虐待・性暴力の対応と相談　予防教育とエンパワメント」として，学生向けの独立した講義であったが，時間の関係でこの講義を割愛せざるをえなくなった．しかし，「性虐待」のテーマは，性の健康教育から外せないと考えて，中学年の模擬授業として急遽新設したのである．したがって，プロジェクトチームとして授業内容や教材・手法などについて，基本的な議論・検討が不十分だったことは否めない．このことは，主に性被害・加害想定のロールプレーイング場面に対して，『何をしたいのか？　すればいいのか？　分からない！』，『被害者，加害者，第3者の立ち位置が分からない，あいまい.』等の，学生の批判として具体的になったことでわかる．

Aさんの感想：『高校生の時に，うちは女子校で，学校の前に変質者がいることもちょこちょこあったんですけど，その時に，先生は「スカート丈を短くする子ほどねらわれるから，スカート丈を長くしろ！」と言っていて，なんか変だなあと思った．何か高校生の制服だからみたいに言われたみたいで．今日の授業みたいに「あなたは何も悪くない」って言える先生に自分はなりたいなと思った.』

Aさんは，ここでも自分の実際の生活経験をベース

に授業を受け，性被害を受けた側に一切の落ち度はないこと（スカート丈が短いから狙われるのではない！　狙う方が絶対に悪い！）をしっかり感じ取っていることが分かる．授業者の新崎は，ロールプレーイングでのＡさんの役割を覚えている．Ａさんは，想定場面に関与しない，せりふのない第三者の役であった．

第⑦講義は高学年の模擬授業の１「おとなになりゆくこころとからだ～いのちのつながり～」である．２時間完了で，模擬授業は2/2で，「二次性徴＝射精と月経」と「つながるいのち・いのちをつなぐ＝性交」を主な内容としている．中学年より当事者性の高まった時期での二次性徴の学び直しである．残念ながらＡさんは，この講義も欠席している．

第⑧講義「現代社会と子どもたち」は，次の２つが主な内容であった。

・若者たちを取り巻く性の状況と性情報の実態（エイズ情報を含む）
・今，必要な性の健康教育の内容と方法（水の交換のワーク）

Ａさんの感想：『スポイトの実験はたくさんの人のコップがにごって，私のコップもにごってなんだか怖くなりました．／HIVの検査，早めに受けておきたいと思うけど，なかなか勇気がでません……．でも，今日の授業を受けて，やっぱり行ってみた方がいいよなあと思いました．／先生が「人は，子孫を残すためだけの交尾で終わらず，肌で人の愛を感じ，(関係を）つくっていける性交ができるので，すばらしいと思う」という言葉に，すてきだなあと考えさせられました.』

水の交換ワークのドキドキ感，HIV検査の大切さは分かるけど勇気がでない！というとまどい，ふれあいの性交を気高くとらえられる感性，すてきな感想だと思う．

第⑨講義「〈しょうがい〉のある子どもと『性の教育』」について

テーマ：こころとからだの主人公に
内　容：日常生活での性教育（身辺自立などに関わる中での性教育）・授業としての性教育

Ａさんの感想：『ガーターは今は何とも思わないのかな．私はガーターは見せてもオシャレだと思っていたし，雑誌や，ビジュアル系の人とかはいてるのをPVとかで見ます．ガーターはオシャレではなかったのか……．／性器に顔があった絵本，私の家にもあります．母が小さい頃読んでくれたのを覚えています．月経のこととか性交のこととかけっこう母は私が小さいころから教えていました．今思えばよかったと思います.』

この講義は，しょうがいのある子どもたちの「性」の問題を，生身で感じ取り，理解できる迫力に満ちた講義である．学生たちは，それを衝撃＝感動という言葉で受けとめている．ところが，Ａさんは，他の学生には印象の痕跡すらない“ガーター”にこだわり，そこから先に進めていないことがうかがえる．自分はオシャレだと思っているガーター．それが，「性」を商品化する小道具の一つに使われている事実を受け入れられないようだ．そしてＡさんの意識は，読み聞かせに使った「せっくすのえほん」の思い出⇒母とのふれあいのあったかさを想起できて，何とか落ち着いている．後から考えると，この感想で示された意識のずれ＝違和感が，後々まで大きく引きずられてきているように思える．

第⑩講義　高学年模擬授業２「人を“好き”になるってどんなこと～豊かで安心な人間関係作り～」について．このテーマは，学生たちにとって今の地のままで取り組めるとあってか関心が高かった．自分たちが，実際に模擬授業をする時のテーマとしてとりあげたグループが多かったことでもわかる．

Ａさんの感想：『私は「友達のままで」っていう言葉で納得できるけど，「嫌いじゃないけど……」って言われるのは納得できないから，やっぱり「ごめんなさい」ときちんと言いたいと思うし，相手からも言われたいと思います.』とあって，授業の目標である，自分の気持を大切にして相手に届くように伝える（＝相手をなるべく傷つけないように断る）大切さを，感じ取っていることがうかがえる．

第⑪講義　高学年模擬授業３「いろいろな家族・いろいろな生き方」(２時間完了)

Ａさんが感想に，消え入りそうなか細い字で『今日は何をしたいのかわからなかったし，とにかくぜんぜんわからなかった.』と書いた問題の模擬授業である．新崎が担当した．

次回，『前時講義のふり返り』の資料となる全員の感想文をまとめる時，授業者としてＡさんのこの感想に

誠実に対応したいと思い，次のようなコメントを書いた．

⇒*こんな苦痛な思いで授業を受けていた人がいることに気づかずに，本当にごめんなさい．消え入りそうな字を目にして，その時のあなたの辛さそのものが出ているようで心が痛くなりました．こころよりお詫びします．*

何が，どこで，どういけなかったのだろうと，授業の様子を何回もふり返りふり返りしてみました．あなたの様子や表情も思い起こしてみました．そして，ひょっとしたら『分からなさのきっかけ』は，『ここ』にあったのでは？と…….

ジェンダーを考えるワーク②の場面です．「女社長⇔男社長，女校長⇔男校長」は，（○）でも（△）でも，どちらでも有り得るとあいまいにしたままだったこと．後の全て（△）になった対言葉についても，なぜそうなのかの説明が不十分で，きちんと納得のいく説明になっていなかったこと，が混乱のきっかけになったのではと思い当たりました．導入場面での混乱を置き去りにしてしまったのは，全て授業者の責任です．もし同意してもらえるのなら，少しでも気持と授業内容の回復をさせてもらいたいのですが…….

Aさんは，次の第⑫講義に大幅な遅刻をしてきたので，このコメントを直接的には耳に届けることができなかった．ふり返り資料としてAさんの手元に渡っているので読んでくれてはいると思う．ただその後，このことについて授業者もAさんに言葉をかけていないので，授業者の分析が的確であったかどうか確認できていない．女社長・男社長や女校長・男校長という言い方は，通常使ってもおかしくない言葉として，Aさんは（○）と答えていた．（○）と答えたのはAさんともう一人の2人だけだった．“ガーター”にこだわりを示したAさんが重なってくる気がしている．

想定家族とそのストーリーに沿って「寸劇」作りをするワークでは，再婚夫婦に生まれた赤ちゃん役だといって，そっとしゃがみこんでいたAさん．ジェンダーや多様な家族をテーマにした授業作りに，一石も二石も課題を投じてくれている気がする．

第⑫講義「学校教育における性の健康教育の位置づけと体系」

この講義のメインは，自分たちなりの「小学校性の健康教育カリキュラム」を作ることであった．このカリキュラムを基にして，自分たちの模擬授業案を考えることになっている．模擬授業の話し合いがしやすいメンバーでグループを作って活動が進んでいたので，遅刻してきたAさんには，人数の少ないところに入ってもらった．

Aさんの感想：『模擬授業ぜひやってみたいです．先生になったら授業で積極的に取り入れていきたいけど，1人でやっていくのはやっぱりいきなりはできないから，今グループでみんなで話し合えて，先生たちにアドバイスもらえるのはすごくいい経験になると思うからです．1月6日まで時間はかぎられているけど，がんばろうと思います．』

第⑬⑭⑮講義は，「模擬授業発表」となっていた．発表グループでなかったからか，Aさんは第⑭講義を欠席している．次は，第⑬講義のAさんの感想である．

『それぞれ本当に興味のある内容でいいなあと思った．いのちのつながりのお父さんお母さんカードは，シングルの家庭の子がいる教室でどうやっていこうか課題だなと思った．私もシングルの家庭で育ったのだが，家庭科で両親の家庭，シングルの家庭，独身の円グラフを見た時，差別されているようでいやだった．』

最終講義時に答えてもらったアンケートからAさんの回答

① 今の小学生に性教育は必要と思いますか．
　＊思う

② あなたは教師になったら，性教育をやりたいと思いますか．
　＊積極的にやりたい

③ あなたが教師になったら，性教育をやる自信がありますか．
　＊ある

④ あなたの性知識はどのくらいのレベルだと思いますか．
　＊低い

〈自由記述〉家庭の人に授業参観を見にきてとはっきりいうという授業が，それをいったらその家庭がこわれてしまうのでは？と思ったし，家庭のことにそこまで授業でやる？と思っ

ていたので……はい．そんな感じでした．

以上，A さんの姿を追ってみると，ジェンダーや多様な家族をテーマにした授業に強い抵抗感を持っていることは明らかなようだ．このことが，単位取得に影響のあるレポート提出まで断念させたのだろうか？　ただ，最終時のアンケート結果をみると，A さんは，小学校での性教育は必要だと思っている．そして，自分が教師になった時には，積極的に性教育をやりたいと考えているし，やる自信もある．しかし，今の自分がもっている性に関する知識のレベルは低いという認識を示している．性教育の必要性や実践の意欲・自信は高くもっていながら，肝心の性に関する知識が低いという認識が意味することは何か？　ひょっとしたら，A さんは，“ 理解できない！ ” と頭を抱え込んだジェンダーや多様な家族に関わる “ 知識 ” の低さのことが，強く念頭にあったのではないだろうか．“ 抵抗感 ” に縛られたままではいたくないという，A さんのかすかな意識の変化としてみてとりたい．

ジェンダーや多様な家族は，“ 知識 ” ではなく “ 人権 ” を主軸に授業化すべき重要テーマである．避けては通れない．A さんは検討すべき課題をたくさん示してくれている．

第 4 章　考察と課題

第 3 章で概観したアンケート結果や感想から，学生の意識の変化について考察する．

まず，アンケート結果を考察していく．「性教育の必要性について教えてください」という設問中の「①　今の小学生に性教育は必要だと思いますか」という問いには，「思う」(26 名→27 名)，「思わない」(0 名→0 名) という結果であり，アンケートに答えた学生全員が性教育の必要性を感じていた．しかし，同大学の小学校教員養成課程の学生すべてが性教育を必要と感じているわけではない．そもそも「性の健康」教育の必要性を感じているからこそ，選択科目であるこの講義を取っていると考えられる．愛知淑徳大学文学部教育学科の在籍学生は，平成 22 年 5 月現在で 108 名であるから，108 名中 27 名 (当講義受講者 28 名中 1 名は最終アンケートに参加していない) が性教育の必要性を感じているといった方がよいだろう．

次に，「あなたの性教育に対する意欲について教えてください」という設問中の「①　あなたは教師になったら，性教育をやりたいと思いますか」という問いは，多くが「積極的にやりたい」(初回 0 名→最終回 9 名)，「やってみたい」(初回 22 名→最終回 17 名) (合計初回 22 名→最終回 26 名) と答えていた．それほどでもない (初回 4 名→最終回 1 名) と答えた者も，最終回のアンケートの自由記述欄で，「教師になった性教育の授業をやれる自信はあまりないけど，やらなければいけないと思った!!」(D) と述べていることから，意欲はあるということが看取できる．

「②　あなたが教師になったら，性教育をやる自信がありますか」では，全体としては，「わからない」(初回 18 名→最終回 16 名) が最多であるが，「ある」が増し (初回 1 名→最終回 6 名)，「ない」が若干減少 (初回 7 名→最終回 5 名) した．この変化は，講義の模擬授業を通して学び，自らも模擬授業を実践してみたことによる自信の表れであるともとれる．

ただし「③　あなたの性知識はどれぐらいのレベルだと思いますか」では，「高い」(1 名→0 名)，「普通」(19 名→19 名)，「低い」(6 名→8 名) という結果になっている．模擬授業で自信を得た一方，自らの知識の足りなさも自覚できた結果だと考えられる．知識の足らなさを知らなければ，改めて学習しようという意欲は湧きにくい．まず，「性の健康」についての知識をどれくらいもっているかを自覚することは，更なる学びや取り組み姿勢の大切な動機になりうる．ただ問題は，ここでは「性知識」の中身が問われていない．この段階での「性意識」は，漠然とした性知識もしくは学生それぞれが考える性知識であり，そのレベルが高い・低いという認識が示されているとみるべきであろう．

なお，学生の感想からうかがえる「性知識」の中には，明らかな間違い (科学的でない) や言葉・用語の誤用，また，授業者への的を得ていない “ 質問 ” や “ 批判 ” という形で散見できる．例えば，学生の「性知識」は，「HIV と AIDS の違いが今まであいまいだった」(第 7 回，L) というような感想からうかがえる．なお，具体的には書いてはいないが，「自分自身性について知識はあると思っていたのですが，この授業を受けて全く知識が足りないということと，これから先もっと知識を学んでいかなければならないなと感じました」(最終回，J) というような感想を書く学生が毎回散見できた．

また，的を得ていない “ 質問 ” としては，授業中に解

説したにもかかわらず，「『交尾』『性交』の使いわけをする理由は結局なんだったのか分からず」(第7回，L) 質問する者が複数いた．また，最も学生の印象に残っていると思われる障がいをもつ子どもの「性の健康」教育(第9回）の感想では「(障がいをもつ子どもたちが演じる…引用者注）劇を見て，なんで男の子と女の子が離れて会話しないといけない，手をつないではいけないと教えてこられたのかよくわからなかった．最初からそう教えなければいいのに」(M）というように，障がいをもつ子どもの現状への認識と想像力の欠如が垣間見られる．

また，模擬授業への“批判”としては，授業は試行錯誤し創り上げるものだということを授業者は伝えたかったのだか，「先生たちで話がまとまってなくて，最後にひっくり返すなら，90分が意味ない」(第10回，N) という批判や，「性の健康」教育課程をつくる際は，「教える側としては，ある程度の正解は欲しい」(第12回，N）というように，「正解」を求める気持ちの強い者もいた．

また，第8回の「現代社会と子どもたち～若者たちを取り巻く性の状況～」で，「水の交換」を実施したのであるが，失敗してしまった．それに対して「先生たちの準備不足（？）でうまくいかなかったのに，いい体験だったとして，次に活かすことだけ考えて謝ることばがなかったのは少し残念だった」(第8回，M）というように，消費者的な感覚（？）で授業を受けている者も見受けられた．

したがって，今後「性知識」を問う場合，

- どのテーマに関するどのような性知識が足りないのか？
- どの授業によって，すでにもっていた性知識のどこをどう修正したのか？

などの視点を明確にもって取り組めば，実のある「学生の意識変化」や「授業評価」に迫ることができると考える．

次に，学生の授業後の感想の考察であるが，講義の初回は恥ずかしさがあったが，回数を重ねるにつれ，「性の健康」という視点で客観的な見方ができるようになってきている．実は，最終回のアンケートの自由記述欄に，「まだ，はずかしさも抜けず，本当に自分が性教育の授業を行うことができるかは疑問が残りますが，頑張っていきたいです」と書いた学生もいたのであるが，「この授業を受けてきて，最初は思っていなかったが，だんだんと性について知ることは，みんなが持っている権利なんだと思える様になりました．また，性について知っていくことは，私たちの体や命のことなので本当に基本的なことなのだと思います」(O）とも述べており，科学的な視点に加え，権利としてとらえられるようになっていることがわかる．

なお，大学生になっても科学的な性知識を持っていない者がおり，模擬授業によって新たな知見を得たという学生も散見できた．言いかえれば，新たな知見（知識の面や授業技術の面も含め）が毎回あるからこそ，積極的に受けとめることができたのであろうし，授業者の意図をくみ取り，深く考える契機にもなったであろう．

最後に，レポートを断念したほど自身の家族観を揺さぶられたと思われる学生〈第3章の〈3〉で報告〉，および他の模擬授業よりも批判や疑問の感想がやや目立った性被害の模擬授業の課題である．まず前者について，授業者は，いろんな家族がいてもいい，それは誰にも非難されないし，してはいけないことなのだというメッセージを強烈に発したつもりであった．しかし，そのメッセージが届きにくい学生もいるということが明らかになったことは，特に性と社会の関係を考える上で示唆に富むと思われる．「性の健康」教育全体に通じる点でもあるが，性の科学的知識とともに，ジェンダーや権利の視点を今まで以上に丁寧に学生に語りかけることが重要であることが再確認できたからである．（性の）科学的知識は，人権意識やジェンダー平等の意識がなければ，いくらでも逆（人権無視・ジェンダー不平等）に利用可能だからである．

次に後者について，どのような感想があったのかを概観してみよう．

「傷つける行いというのはどのようなことかであって，だんだん大人の声かけにうつってしまっているように感じ」(第6回，L）た．

「ロールプレイして，だから何だって印象を受けます．子供に何を教えたいのか…….触られたら，イヤって言いなさいってことなのか，大人に言えってことなのか，なんかぼやけてる気がしました」(第6回，N)．

また，同様に質問を見てみよう．

「「誰にも言っちゃダメだよ」といわれた子どもは大人に話すことができるんですか？」(第6回，P)

第6回の模擬授業は，準備不足であったことは否めなかった．しかし授業者は，性被害を受ける者への共感や

想像力を働かせてほしいというメッセージも込めロールプレイを行い，対処法をそれぞれが考えエンパワメントをしてほしいという内なる想いがあった．しかし，上記の学生たちには伝わらなかったようである．授業の内容や方法について，より深い議論をすることで次に活かしたい．

おわりに

3 年目である 2010 年度は，2009 年度に明らかにされた課題を克服し，よりよい講義を構築したい．

本論文は，第 1 章を木全，第 2 章を大塚，第 3 章 3 を新崎，第 3 章 1，2 と第 4 章を村瀬が書き，その後 4 人で話し合いながら，現在のかたちにまとめた．

最後になりましたが，こうした授業実践と報告の機会を与えていただいた松田秀子先生に感謝いたします．

注

1）木全和巳，大塚あつ子，新崎道子，村瀬桃子（2010）「小学校教員養成課程における〈性の健康〉教育のとりくみ」，『子ども発達学論集』第 2 号，日本福祉大学．
2）同前，55 頁．
3）前掲，75 頁．
4）同．
5）同．
6）数見隆生編著（2010）『10 代の性をめぐる現状と性の学力形成』かもがわ出版を参照．
7）たとえば，加藤千恵子，高橋里奈，谷内このみ他（2009）「高校 1 年生の性知識と性意識の変化から見るピア・エデュケーションの効果」『日本看護学会論文集　母性看護』第 40 号，pp. 135-137，平岡友良（2007）「高校生に対する性教育講演前後における性意識の変化についての研究」『思春期学』第 25 巻第 1 号，pp. 167-175，武井香瑞誉，小島朋美（2005）「高校生の性に関する意識の変化 —— 性に関する学習前後の比較から」『日本看護学会論文集　母性看護』第 36 号，pp. 110-112 などがある．
8）横湯園子編著（2010）『ピアカウンセラー養成プログラム —— 自分がわかり，人の話がきける生徒に』かもがわ出版．